地帯、人口約一万五千の小さい町で、山脚よりの、一区劃で採集した。昨年2月より採集を初め、主として金網籠式捕鼠器で捕え、この外に買上げたものを含んでいる。成績は *R. norvegicus*, *R. alexandrinus*, *Mus molossinus* が夫々 54 (55.1%), 41 (41.8%), 3 (3.1%) である。*norvegicus* では♀♂の比は、42.5:57.5 *alexandrinus* では 53.7:46.3 である。当地では *norvegicus* が *alexandrinus* に比して僅かに多い。文献によると古い時代又は田舎程 *norv.* が少ない傾向が見られるが、当地では農村に接した田舎町であるために、*norv.* があまり多くはないのではないかと思う。寄生していた蚤類は、*Leptopsylla musculi*, *Ceratophylus anisus*, *C. fasciatus* の3種で、その順序で少くなる。*fasciatus* と *anisus* とは、合計 31:93 であるが、この事は日本各地の一般の傾向とは相反している。只北原氏の福岡(昭和16-17年)で調査では *anisus* が断然多いが、当地方が福岡に近い関係か、又は農村である事に意味があるのか、今の処分らない。外部寄生虫としては、その他に *Polyplax spinulosa*, *Laelaps echidninus*, *Liponysus bacoti* を得た。

次に本年一月より、山地の灌木林の中で、パチンコ式捕鼠器により、野鼠を捕えた。之は何れも *Apodemus speciosus* であり、皆恙虫が多数寄生していて、現在までの処では、*Trombicula fuji* が最も多く、次で *T. kitasatoi* も相当についていて、その他に *Gahrlepiea* sp., *T. miyajimai*, *T. kuroshio* を認め、更に新種と思われるもの一種を得た。その特徴は背甲枚が五角形を呈し、感覚毛は単條或いは2~3本の細枝があり、触鬚の毛は何れも分枝し、第3脚基節の毛は、7~10本あり。胴部背面の毛は不規則で、80本以上を算える。

〔長崎大風土病研衛生動物〕

ワルファリン(0.025%)含有のデスモアによる集團駆鼠実施について 小林 弘

Kobayashi, H.: Control of rats by "Dethmor"

我々の如く衛生行政を担当する者に於ては鼠族駆除事業は野外であり、研究室内ではないし多くの住民と接しつゝこの事業を実験としてではなく広般な実施として行わんとするには諸々なる困難がともなう。今度新しく利用されつゝあるワルファリンが衛生行政の上で実際の価値がどうであるかと云う事についてワルファリン含有デスモアを以て集團駆鼠を実施したのである。方法 A. 実験室内の試験(略) B. 一般地域の実験 野外実施としては市内本町の戸数153戸を対象とした。毒餌投與

の状況は毒餌はワルファリン0.025%含有のデスモア1gを以て1個とし、水ねりの團子を作る。此の團子1個につきワルファリン0.25mgである。此の團子を各戸に初日に10個與え第2日以後は消費された個数だけ補充して毎朝團子数が10個であるようにする。結果は総設置量27360gに対し総喫食量は12904gであつて、その率は47.2%となる。毒餌投與に併行して調査せる死鼠の発見数は総数83匹であつたが発見されない死鼠も相当あるものと推察される。喫食率曲線は第2,3日目より上昇し、第5,6日目頃より、大体50%前後を示し、次で第11,12日目より急激に低下する。その曲線と3,4日のずれを以て死鼠発見率線があらわれている。死鼠発見曲線は先にも述べた通り死鼠発見が必ずしも充分でないでこれのみにより決定的に考えることは出来ないが、少くとも喫食率及び実験室内の試験とを比較してこの曲線は毒餌投與の日より大体第4日目頃より現われ漸次上昇して、6,7日目頃に一頂点を作り、次で約1週間後に前のよりも低い一つの頂点を曲線をえがくものである。この曲線が零線に近づく程駆鼠の成績は挙るものと考えられてよい。

總括的考察: (1)「ワルファリン」の効力は鼠族に対して決定的に効く。(2)デスモアはその成分にワルファリン以外の鼠の嗜好物である「とうもろこし」の粉末を入れた事は非常によかつた。(3)連続投與の場合の費用を各戸が全地域が一齊に実施すればその負担は必ずしも高價ではない。(4)投與に手数と日数がかかるので粉末剤と共にキヤラメル様のものを製造する方がよい。(5)取扱上有毒成分が無味無臭のワルファリンであるために使用について充分注意する必要がある。(6)結論的に云つて若干の点を除けばワルファリン及びデスモアは今日までに現われた駆鼠剤のうち最も優秀であると云い得る。

〔彦根マラリア研究所・彦根市衛生課〕

京都産刺蝶蠅について 西村 輝久

Nisimura, T.: Note on the species of *Phlebotomus* in Kyoto

1949年夏以来、京大狂犬病研究室主任山岡博士が、京都市内同氏宅にて採集せられた刺蝶蠅のうち雌12匹、雄5匹について Raynal 氏の記載に準じて、鑑別的根拠となるべき形態を調査せる結果、これら刺蝶蠅は総て *P. squamirostris* Newstead なる事が判明したので、其形態及びその計測値を表示した。又同刺蝶蠅の刺傷後の皮膚に表われる反應を説明した。〔京大狂犬病〕